

性差は超えられる・性同一性障害を生きる

佐倉智美

◇カフェで語らう“女”

三月の淡い雨が降る午後、私は近所のカフェレストランで、A子ちゃんといっしょに遅い昼食をとっていた。去年知り合った彼女は、偶然にも同じ年で、職業も同じフリーのライター。以来意気投合し、今では大事な“友達”のひとりだ。

「このレディー斯拉ンチのチキン、おいしいなあ……」

「そういえば学生のころ、北海道に行ったときさあ……」

「そうそう、私もそれが……」

デザートとコーヒーを平らげた後も、A子ちゃんとのとりとめない話は続く。食事をすませて、とつとつと仕事に戻っていく男性客からは「まったく女はおしゃべり好きだな」などと思われるかもしれない。むろん私たちだって、ヒマなわけではない。A子ちゃんはこの後京都へ取材だし、私も夕方前から塾講師のバイトがある。

だが最近の私は、こんな何気ないひとときが、ことに心地よい。こうした友人との交流。あるいは街で、服やアクセサリー、化粧品や、その他かわい雑貨などをウィンドーショッピング。女性としてそうしたことができる日々は、今の私にとって、とても幸せなことだ。だが、かつての私は、その機会に恵まれていなかった。なぜならば私が、男性だったからである。

◇男としての苦悩・女としての平安

幼いころの私は、あまり男の子らしくない男の子だった。外で泥んこになって走り回るよりも、家の中でおもちゃと遊ぶのを好んだ。遊び相手も男の子よりも、女の子のグループに混ぜてもらおうほうが、しっくりくるものを感じていた。

しかし親をはじめとするまわりの大人には、

それは好ましくない現象に映ったのだろう。「キミは男の子なんだから」と、なにかにつけ、男の子と男の子らしい遊びをするように“指導”されたものだ。そして、男の子グループに入ると、色白で力も弱かった私は、地位は最下位になった。男の子たちがよく遊びのタネにする、野球もプロレスも興味を持たなかった私は、補欠や“技のかけられ役”としてしか存在できなかった。ようするにいじめられっ子である。

どうして男の子は男の子らしくしないといけないんだろう。それに、どうして自分は男の子なんだろう。女の子だったらうまくいったのに……。

詳しく語りだすとキリがないので、間は割愛するが、こうした社会との不調和は、社会人になっても続いた。いや、社会人になつてからが本番だったと言つてもよい。

だいたいにおいて会社というところは、女性と男性を区別することを前提とした組織だ。私は男性社員としての仕事をあてがわれ、会社の売り上げのために貢献することを期待された。昼休みの女子社員の、楽しそうなお弁当の輪に入ることなど、とうてい許されることではなかった。むろん私にとって、前者はどこか違和感があり、後者のほうがピツタリするものがあるのである。

私は、男性として社会にうまく溶け込めない自分に悩んだ。劣等感にも苛まれた。えもいわれぬストレスの日々は続いた。「性同一性障害」という言葉を知ったのは、そんな葛藤の果てのことであった。

「性同一性障害とは、身体的性別と精神的性別が一致しない状態……」。埼玉医大で、いわゆる性転換手術がおこなわれるようになると、そんな説明も新聞に載るようになった。

「これだ！」

長年の謎が解けた思いだった。そうにちがいない。私は身体的には男性。しかし心は女性なのだ。そう考えると、すべてつじつまが

合う。こうして私は、心の性別である「女性」として生活するようになった。

前述したように、それはたいそう充実している。消費生活は、自分の本来の好みに合わせたかわいいものを選んで差し支えがなくなった。人間関係も良好になった。同性が女性であるということは、こんなにも気持ちのいいことだったのだ。女友達との「本当の友人としてのつきあい」ができるようになったし、職場でもしかり。塾講師のアルバイトは、女性として務めているのだが、同じバイトの女子大生と遊びに行ったりして楽しく過ごしている。そして何よりも、自分に自信が持てるようになった。鏡に映る自分の姿にも納得できる。容姿や言動や、その他あらゆる点で、自分を好きになれるのだ。

これらの充足感が、男性だったときには、望んでも得られぬものだったのは、言うまでもない。そうして私は、これからも女性として生きていくのである。

もつとも、ここに至るまでの道程が、そんなにスムーズだったわけではない。

◇情報不足が当事者を苦しめる

日本の性的マイノリティをとりまく状況には、まだまだ課題が山積している。

何よりも、情報量が少ない。そもそも私が、「性同一性障害」という言葉に出会い、自分がそれにあてはまると知るのにも、三十歳を過ぎるまでかかった。近年は、インターネットを通じて当事者が情報発信をする道も開けているが、それもまだ発展途上である。

だから私が「これからは女性として生きてい」と思った最初のころは、まさに手探り状態だった。通販でスカートを買ったり、化粧のしかたを試行錯誤したりと、非常に効率の悪い道をたどったものである。しかもそれらには、「女装なんて変態行為だ」という世間の「常識」による評価がつきまとい、大変な罪悪感を抱かされてしまう。

また一般の理解がまだまだ得られていないため、初期には街で白い目で見られることも耐えなければならぬ。化粧にもまだ慣れない時期、全身に女物の服をまとい、カツラを深々とかぶって、おそるおそる外出すると、すれ違う人々がヒソヒソ話をしながら私を指さしたりする。女子高生の一団から、「オカマやー！」と叫ばれたこともある。

私の場合、今ではそれなりに女性に見える容姿を手に入れたので、これも昔話ではある。公衆トイレは女性用に入っているし、髪を切るのは美容院。塾のバイトも女性として（元が男性だとは隠して）務めている。しかし性同一性障害者の中には、身体的な条件などによつては、それが不可能なケースもある。いわゆる「女装サロン」の中だけで女装して過ごす人が多いのも、そこに一因がある。彼ら、いや彼女らが日の当たる場所に出てこられるようにするには、ぜひとも一般の人々の「心のバリアフリー」が必要である。

この点、同じ性同一性障害者でも、女性から男性になりたいという場合は、女性が男物を着ることに対する世間の抵抗感が少ないのでラクだという見方がある。しかしそれは傍目からの勝手な解釈らしい。自分は男性なのだという主張を込めたファッションが、単にボーイッシュな格好の女性としてしか認識されないことは、大変な苦痛なのである。

また、性同一性障害と同性愛のちがいがいも、なかなか理解されていない。例えばゲイの場合は、男性として男性を好きになる。レズビアンの場合も同様で、自分も相手ともに女性なのである。ゲイの女装は、あくまでもヘテロセクシュアルに見えるほうが世間が認められるという、外的な要因が主なのだ。一方、私のように生まれは男性だが女性になりたいという人、あるいは女性として生まれたが男性として生きたいという人にとつては、元と反対の性別としてまわりから扱われることが重要なのである。

ちなみに私の性愛の対象は女性（じつは結婚していて“妻子”がいたりする）。つまり心理的にはレズビアンなのである。だから、私のことを“女装した男性”だと知った瞬間、「あっ、あなた『ゲイ』だったんですね」とか言う人には、それはちがうぞ！ と、つい思ってしまうのである。

◇性別のバリアフリーへの課題

私の今後の生活にも、不安は少なくない。塾のバイトも“元男性”だとバレれば、クビは必定である。まあ、このように雑誌や書籍に原稿を発表しているのが、経営者の目に触れるのならやむを得まい。しかし、住民票を出せとか言われれば困ってしまう。そうした公的書類は、あきらかに男性のものとかわかる本名が記されたものしか用意できない。おまけに「性別・男」という表示まで、わざわざ印字されている。

仮にそれを出すとしても、市役所に取りに行くときが、また大変である。私の居住する市は、人権意識が比較的高いため、プライバシーにも配慮していて、第三者が他人の住民票を勝手に取らないよう努めている。そのため、あきらかに第三者かと思える人が窓口に来ると、チェックを入れられてしまうのだ。

「住民票は、何に使われるのですか？ ご本人とはどういう関係ですか？」

「……私が本人です！」
「っ！……」

こうしたやりとりをしないといけないのは、けっこう心労の種である。

クルマを運転するときも、同乗者に私の戸籍上の性別を隠している場合は気をつかう。違反や事故などで、警察に免許証を見せなければならなくなると、その同乗者にも免許証の内容を知られてしまうからだ。実際、先日は飲酒検問に出くわし、酒も飲んでないのに冷や汗であった。

温泉旅行や海水浴には行けないというのも、

今後は困ることが増えるかもしれない。トイレは、基本的に個室の中のことは他人に知られないので問題がない。しかし服をすべて脱げば、胸のふくらみが詰め物で、さらに股間にはあつてはならないものがぶら下がっているのがあらわになってしまう。旅行で女性どうし同室に宿泊したり、いっしょに大浴場に入ったりのするのは、したいけれどもできないというのが現状である。

正社員として就職すれば、社員旅行もあるし、社会保険の関係で戸籍上のデータが知られてしまうことも少なくない。これは、性同一性障害者が望む性で生きようとすれば、主要な就職口から締め出されてしまう大きな原因となっている。そして就職は、経済的な自立と係わってくるだけに深刻である。性転換者だと知った上で採用してくれるような企業は、そうそう存在しない。性転換者だと隠して就職するのも、そんなわけで難しい。結局私だって、バイト待遇の仕事のかたわら、原稿料や講演料などを細々と稼いでいるにすぎない。その金額は年収単位で合計しても、じつにつつましいものだ。三十代の男性として普通に会社員をするのに比べて、収入の面では圧倒的に不利なのは言うまでもない。

こうした問題の解決には、どうすればよいのだろう。温泉旅行は、性転換手術によってクリアできるかもしれない。だが、埼玉医大の順番待ちの列は、数百人に達しているという。そもそも胸がなければ女ではない、立派なペニスができる男の証だ、などという思い込みは、性同一性障害とは関係ない一般の男女をも苦しめていることもあるのではないか。公的書類に関しても、性同一性障害を理由とした名前の変更は、ようやく認める家庭裁判所が増えてきたばかりである。性別の変更となると、まだまだ道は遠い。夫婦別姓などの法案さえ、難癖をつける議員の多い国会では、期待するのがまちがいの気さえする。

結局、まわりの人々が変わることが、いち

ばんの早道なのだろう。「私は昔は男でしたが、今は女性として生活しています」。これを皆が受け入れてくれるようになれば、何も困ることはないのだ。すでに私のまわりでは、少しづつ理解が広がっている。私の配偶者、法的には“妻”と呼ばれる人だが、彼女にも長い迷いの末、すべてを打ち明けて、今では普通にいっしょに暮らしている。冒頭のA子ちゃんも、私の元の性別を知った上で、ちゃんと女友達どうしとして接してくれる。こうした理解がもっと広がればよいのだが、では、そのためにはどうすればいいだろうか。

卵と鶏の関係になってしまっただが、やはりできるだけ多くの人に、こうした事実を打ち明け、知ってもらいよりほかはないであろう。知らないということ。多くの差別は、そこから始まっているのだから。

◇性別を変える・性差を越える

雨はいっしょに上がり、カフェレストランの窓には柔らかな陽光が差し込んでいた。

「……いやー、でもよく言われることはあるよ。どうして女“なんか”になるの。男のほうで得じゃないってね」

「まあ、やっぱり世の中まだまだ男社会で、女性の立場は弱いのが現実かなあ……」

A子ちゃんとの話題は、世の中の性別についてのもに移っている。彼女とは、去年、地元自治体の発行する男女共同参画社会のための情報誌の記事を、共同で執筆した仲間でもある。

「もしかしたら……」

「え、何？」

「“性別を変える”よりも、“性差を越える”ほうが難しいのかもしれないね」

「えー、どういうこと？」

「性別を変えてしまえば、その性別でいたいことができるわけよ。でも、例えば男のままでかわいいものを身に付けたり、女の人が家事を旦那さんにまかせて、会社でバリバリ

働いたりっての、けっこうキツイでしょ」

「なるほどー、そうかもねえ……」

いや、そうにちがいない。私は思った。「男」か「女」か。世の中は、そうした性別二分法で動いている。だがそれこそが、万人が「自分らしく」生きることを妨げているのではないだろうか。

「そろそろ行こうか」

「あら、もうこんな時間……」

カフェレストランを出ると、風に春の暖かさがあった。ふいにA子ちゃんが言った。

「あー、今度の締め切りがすんだら、ちよつとゆつくりしたいなあ……。ね、温泉でも行けへん？」

「えっ！ 温泉？ 私……」

「いいじゃん！ S子ちゃんも誘って、三人で行こうよー」

「う、うーん……」

ふと見ると、雨上がりの空には、虹がかかっていた。

この文書の内容の初出は2000年の

法蔵館発行 季刊『仏教』50号(2000年5月発売分)

<特集・差別の構造>です

この文書は、佐倉ジェンダー研究所webのコンテンツの一部となっています。

<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/mermaid.top.htm>

(「桜色の虹は社会学の夢を見るか」のコーナー)

<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/SociologyCbRw.top.htm>

佐倉智美

Copyright Tomomi Sakura since 1998.